

「新・方法」講義立会記

伊藤聖来

同語反復の定義がよくわかっていないのですが、同じ言葉を繰り返す、ということで SUPERCAR の『Strobolights』という曲を思い出しました。作詞者のいしわたり淳治は、どんどん足していけばどんどん強くなる、というようなことを言っていたのを記憶しています。反復すること、重ねることは強さを生み出すように感じます。

http://www.youtube.com/watch?v=M6RXLCZEU34&feature=player_detailpage

色々なものが足された結果として過剰になったもの、私にはそれがある意味での芸術の極致のように感じられるのですが、そういったものとしてケン・ラッセル監督の映画『Tommy』を思い起こします。The Who の同名ロック・オペラ・アルバムを The Who のロジャー・ダルトリイ主演で映像化したこの作品は、色彩が強烈で、演出が過剰で、全編にわたってハイ・テンションであるため、観ると少し疲れます。しかし、映画の最後の場面は私にとってとても爽快です。ロジャー演じるトミーが全てのことから解放されて、ひとり岩山を狂ったように登って行くシーンなのですが、そこは何度見ても胸が熱くなります。すごい速さで岩山を登るトミーのあの恍惚の表情に、理由もなにもなく神だ、芸術だと感じたのを覚えています。ピンボールの教団が過剰な暴力によって破壊された後のトミーの行動や表情は何かを超越していたように感じました。つまり、過剰になればなるほど何かを超え続け、その超越性ゆえに過剰な存在は宗教的になりうるのではないかと思うのです。そして宗教的であるために人に受け入れられないこともあるだろうと思います。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_detailpage&v=QV_9pn7MGUo

「新・方法」の活動を見ていると、「反芸術」というものを意識せざるを得ませんでした。まず芸術がわかっていないのに、それに対抗するものを理解することなどとてもできないと思うのですが、なんとなく、考えたのは「生活」についてでした。確定申告や節分に、海水浴や早起き。こういった活動は「生活」しているようにしか思えませんでした。「生活」ということは反芸術的なことなのか、なんだかもうわかりません。「生活」というと「生活の柄」が一番先に思い出されます。この曲中の人物のほうがアナーキーかも知れないよなどと思いながら、高田渡さんの『生活の柄』を聴いて寝ます。おやすみなさい。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_detailpage&v=XcUhACXKx7g